

大学生の挑戦を支える言葉・意味・物語の可能性

—みんなのチャレンジ基地ICLaのアクションリサーチから

天野 浩史

大正大学 地域創生学部地域創生学科 助教

(要旨) 本稿は、大学生がどのように挑戦をはじめ、それを育てているのかという点に着目し、フィールドワークを通じて、大学生の挑戦に必要な要因や支援のあり方を提示することを目的としたアクションリサーチである。静岡県静岡市に開設された「みんなのチャレンジ基地ICLa」において立ち上がったプロジェクトの生成と発展過程分析から、「共につくる」という学生スタッフの営みと場の文化を抽出すると同時に、挑戦を支える「仲間」の存在と、阻害する「意識高い系」の眼差しを提示した。これらをナラティブ・アプローチの理論から考察し、場によって紡がられる言葉、意味、物語（オルタナティブ・ストーリー）によって大学生の挑戦が支えられる可能性を示した。

キーワード：大学生、挑戦、フィールドワーク、アクションリサーチ、ナラティブ・アプローチ

1. はじめに

地域に新たな活力を生み出すことが、地域創生には求められている。その一つとして、大学生による挑戦や起業による地域の変化に期待が寄せられている。

挑戦、起業、起業家精神、創発、イノベーションといった領域は、これまでも様々な対象やアプローチで学術的知見、実践知が積み重なっている。「場」に関する研究として、多様な実践の場を分析した今永典秀（2022）において、地域イノベーションを志向する「場」における空間、目的、雰囲気、運営力、引力、継続発展力という要素が示されたり、坂倉杏介（2020）では、事例の分析を通じた創造的な場の創出のためのプラットフォームのあり方に対する提案がなされたりと、質的なアプローチによってその過程やありように迫る研究も多くなっている。

しかし、地域創生の期待を受ける大学生がどのように挑戦をはじめ、自身の取り組みやプロジェクトを育てているのか。こういった問いに答える

研究は多くはない。特に高校生・大学生を対象に据えた研究では、プログラム開発と実践の効果検証、教科教育論的な研究へ偏りが見られ、いまだに十分な答えが見つかっていない。

本稿では、大学生の挑戦を応援する、実在の「場」をフィールドとし、その場に参加する大学生が挑戦を進めていく実際の過程を記述する。それを踏まえ、彼らの挑戦に必要な要因や支援のあり方を提示することを目的とする。

第1章では問題意識と本稿の目的を示す。第2章では、研究方法と調査対象について、特にフィールドについての情報を整理する。第3章では、フィールドワークによって収集したデータを分析し、大学生の挑戦という観点からフィールドを捉え、その事象・営みについて考察する。第4章では、第3章を受けて今後の研究課題を示す。

2. 研究方法と調査対象

(1) 研究方法について

本稿では、静岡県静岡市駿河区に開設された、

大学生の挑戦を支える場である「みんなのチャレンジ基地ICLa（以下、ICLa）」においてフィールドワークを行い、収集したデータから分析を行う。なお、筆者はICLaの開設に企画段階から関わっており、施設管理者（センター長）として場の運営にも関与している。ゆえに、本研究は研究者と研究対象者が協働して研究を進めていくアクションリサーチである。

矢守克也は、アクションリサーチを「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とが展開する共同的な社会実践」（矢守, 2010:1）と定義する。この定義を踏まえれば、ICLaにおける本研究は、ICLaがビジョンとして掲げる「挑戦と応援が循環する、チャレンジにやさしい静岡」という社会的状態を目指した、研究者である筆者と参画する大学生を中心とした共同実践といえる。

加えて、目標とする社会的状態へのベターメント（変化）を念頭に置き、長期的な活動のなかで複数の方法やツールを配置することがアクションリサーチには求められていると矢守は指摘する（矢守, 2010:24-25）。本研究も継続的かつ実践的なアクションリサーチプロジェクトであるため、研究協力者と共に推進する過程で必要とされる課題に合わせて、有効な研究方法を組み合わせている。

本稿では、開設から1年も満たない、立ち上がったばかりの場のなかで、大学生による挑戦はどのように生まれていくのか、それはどのように構築されていくのかという実際の側面を捉えることに主眼を置き、研究者である筆者自身がフィールドに身を投じ、主に参与観察とインタビュー調査から得られたデータに基づいて分析を行う。その際、実践に筆者が参与している点についてはその関わりにも可能な限り言及する。

(2) 調査対象について

本研究の調査対象（フィールド）となるICLaは、静岡県静岡市駿河区小鹿に開設された、大学生を主な対象としたコワーキングスペースである。「挑戦と応援が循環する、チャレンジにやさしい静岡」をビジョンに掲げ、静岡大学、アイザワ証券株式

会社、静岡鉄道株式会社、NPO法人ESUNEの連携により開設・運営されている（図-1）。



図-1 ICLa拠点内の様子

a) 開設の背景

開設の背景にあるのは、大学生が社会に対して不安を抱え、挑戦へ踏み出せない環境に置かれているという問題意識である。特に2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う大学における入学式等の行事の中止、授業のオンライン化、海外留学の停止、経済的負担の増加、先行きの見えない不安の増大等により、様々な挑戦を諦めざるを得ない社会的状況に大学生は置かれている。

その後、対面授業の再開や留学の解禁など、状況は改善されつつあるが、一方で「何かやってみよう」「今の学生生活を変えていきたい」という想いを抱きつつも何をしたいのか分からないという大学生もいる。こういった彼らの「やってみよう」を実現できる環境を作り出し、ハード、ソフトの両面から整備し、その運営を大学生自身が担っていく場の設立が、静岡大学はじめ、関係者間で共有された。

着想から1年近くかけて構想を練り、2022年1月より物件の検討や利害関係者間との対話を進め、2022年8月末から内覧会、2022年9月にプレオープンが行われ、2022年10月より正式に開設となった。

b) 利用者

静岡大学から徒歩15分程度の場所に立地していることもあり、主な利用者は静岡大学生であるが、近隣の静岡県立大学や常葉大学の学生や、市内在

住の高校生も利用している。利用者は、構想にあった「何かやってみたい」という漠然とした想いを抱く学生に加え、より具体的な取り組みのアイデアを持つ学生も利用している。例えば、ある大学生は持続可能な地域社会に関心を持ち、リターナブル食器を地域で仕組み化することを目指しており、現在、ICLaのプロジェクトとして活動が展開している。

c) 運営体制

9名の現役大学生が施設管理やプロジェクトのサポートを行っている。3名の学生リーダー（うち、1名はICLaの副センター長）を中心に、毎週定例の会議にて運営会議を実施し、ICLaの利用者数の増加や運営に関する企画を検討・立案している。

また、センター長、副センター長、プロジェクトマネージャー（会社経営経験のある大学教員・キャリアカウンセラー）、学生リーダーによる経営会議を隔週で実施し、経営に関わる課題の把握と解消、収支状況や企業との関わりに関する事案について検討し、意思決定を行っている。施設の経営、意思決定に大学生自身が参画していることがICLaの特徴ともいえる。

d) オンラインコミュニティの運営

拠点運営だけではなく、オンラインコミュニティ「ICLa みんなの川」¹も同時に運営することで、直接施設に訪問ができなくても、日々の様子や活動しているプロジェクトに関する情報を収集し、必要に応じてオンラインコミュニティ参加者が議論に参加できる仕組みを設けている。一度、施設を訪問した方やサポーターとしてプロジェクトに関わる企業の関係者等にオンラインコミュニティの案内をしており、2023年2月8日時点で146名が参加している。

(3) 本研究における「フィールド」の設定について

上述のように、「施設としての」ICLaに限らず、運営会議やオンラインコミュニティなど、そのフィールドの範囲は多岐にわたる。本研究では、柔

軟にフィールド範囲を広げながらも、基本的に「施設」「会議や相談」「オンラインコミュニティ」、また、後述する「プロジェクト」をフィールドとして設定し、具体的な活動や関係者の様子、コミュニケーションのやり取りを中心に捉えていく。

3. 挑戦が促され、阻害される現実—学生たちの挑戦を応援する場のフィールドワークから

ICLaにおいて、設立当初より挑戦を「今とは異なる世界を知る一步」と定義している。その大小に関わらず、一步を踏み出す当事者が、本人らしく踏み出すことを大切にするという方針を設定してきた。開設から5ヶ月以上経つが、学生リーダーを兼ねる副センター長が取材でその方針を語ることから、挑戦の捉え方は浸透していると確認される。

では、大学生による、本人らしい挑戦とはどのように生まれているのだろうか。ここでは、ICLaで立ち上がったプロジェクトの生成・実践過程から分析・考察を行う。

(1) ICLaで生まれたプロジェクトの変遷

ここでは、オンラインコミュニティにおいて立ち上がり、すべてのコミュニティ参加者が確認できる状態になった活動を「プロジェクト」と定義する。2023年2月8日時点で、26のプロジェクトが立ち上がっており、筆者が確認した限り、19のプロジェクトが何かしら継続して活動を行っている。プロジェクトの一覧は表1の通りである。

発起人が、立ち上げ時に挑戦したいという気持ちを抱いていることは共通ではあるが、立ち上がり方は様々である。例えば、No1「アニメを愛する者の宴」は、ある大学生が一人で立ち上げたものであるが、No3「子どもたちに野球を教えたい」は、大学の準公式野球部に所属する有志数名で立ち上がったものである（その他、No6・8・15も同様）。また、No18「共に『つくる』で未来をつくるクラ

¹ オンラインコミュニティの立ち上げ、運営も大学生が行っている。オンラインゲームのコミュニティとして頻繁に活用される

「Discord」を利用し、オンラインミーティングなどもDiscord内で実施している。

フトインターンを静岡に実装したい！」は、クラフトインターンという事業を新たに立ち上げる事業者とICLaの学生スタッフが協働する形で生まれている（その他、No25も同様）。

26のプロジェクトは生成後、「活動終了」を自分たちで表明するプロジェクトもあるが、一定期間議論の進展がない、スタッフが進捗を確認できないプロジェクトも一部見られる。ただ、そういったプロジェクトのなかにも「偶発的な出会い」によって、新たな展開を迎えたケースもある。

例えば、No5「みんなで金融の勉強したい」は、当初大学生が「お金のことについて知識がない」という問題意識から立ち上がったプロジェクトである。

2022年10月中旬から11月上旬にかけて、学生たちが様々な情報を得ながら、金融庁の発行する『基礎から学べる金融ガイド』を複数人で読む会が開催された。

その後も情報共有程度のやり取りが続けられたが、1ヶ月近くは大きな進展は見られなかった。

表-1 ICLaで立ち上がったプロジェクト一覧

NO	プロジェクト名	立ち上げ日	NO	プロジェクト名	立ち上げ日
1	アニメを愛する者等の宴	2022年10月18日	14	教育現場NPO, NGOの連携によるESD推進事業	2022年12月1日
2	竹問題について語りたい	2022年10月18日	15	食のワークショップを子供たちとしたい！	2022年12月2日
3	子どもたちに野球を教えたい	2022年10月18日	16	静岡を盛り上げるラジオをやりたい！！	2022年12月12日
4	11月19日なんかイベントやらない？	2022年10月20日	17	「あっ、と驚く」パワーポイントをつくりたい！	2022年12月12日
5	みんなで金融の勉強したい	2022年10月20日	18	共に『つくる』で未来をつくるクラフトインターンを静岡に実装したい！	2022年12月13日
6	Web3.0研究会	2022年10月21日	19	外国にルーツを持つ子どもたち向けの日本語教室を立ち上げます	2022年12月19日
7	つくろう、未来のマナビバ！	2022年10月21日	20	本の感想共有会（BIA）	2022年12月19日
8	リターナブル食器の事業をしたい！	2022年10月26日	21	ICLaにある本をもっと生かせたらなあ☆☆	2022年12月19日
9	みんなで会計の勉強したい！	2022年10月29日	22	自然農について学ぶ会	2022年12月21日
10	不登校の子のためのアートクリエイティブスクールをつくりたい～	2022年10月30日	23	Coten Radioで哲学・思想を学びまshow	2022年12月22日
11	「アイドル」を研究したい～	2022年10月30日	24	「若者チャレンジ実態調査」を実施したい！	2023年1月8日
12	ボランティアをともにしよう	2022年11月18日	25	意見募集プラットフォーム「IDEA BOX」やってみたい～市長選を契機に～	2023年1月14日
13	子ども食堂プロジェクト	2022年11月26日	26	教育関係に興味ある学生の人材バンクを作りたい！	2023年1月19日

しかし、翌年1月中旬に、ICLaの立ち上げにも関わったアイザワ証券の社員との出会いで、「大学生が高校生に金融について教える授業をつくる」というプロジェクトへと進化を遂げる。これは、アイザワ証券社員とNo5プロジェクトの発起人が出会い、会話する中で生まれたアイデアを形にしたものである。

その後、12月ごろから本格的に「金融授業の作成」という目標を設定し、発起人含めて4名の学生が授業の開発に取り組んでいった。アイザワ証券ともやり取りをしながら、2023年2月に作成した授業の実施にまで至った。

こういった「偶発的な出会い」の一方で、学生スタッフによる「意識的な参画」によってもプロジェクトは進化している。

No16「静岡を盛り上げるラジオをやりたい！」は高校生が発起人のプロジェクトである。学生スタッフが発起人の高校生と出会い、対話を重ねるなかで、ICLaのプロジェクトとして2022年12月に立ち上がった。

立ち上がり当初より、学生スタッフやプロジェクトマネージャー経由でラジオ関係者の紹介などの支援があったが、同じ頃、ICLaの取り組み紹介を外部で行うという話が経営会議内で議論されるなかで、学生スタッフから「公開収録という形で、ラジオ形式でICLaを紹介する機会を設けてはどうか？」という発案がなされた。発起人の高校生にも確認したところ、二つ返事で承諾され、2023年1月に行われたイベントにて公開収録、生配信が行われた。立ち上がりからまもなく、高校生のやってみたかった一歩が実現したのである。

「偶発的な出会い」や「意識的な参画」によってプロジェクトは進化し、新たなフェーズに進んでいくことを確認したが、こういった創発の瞬間はICLaにおいては少なくはない。それが引き起こされやすい環境の要因として、学生スタッフを含めた、ICLaという場の「共につくる」という文化が影響していると考えられる。

(2) 「共につくる」を体現する学生スタッフ

施設名称や立ち上げ時のコンセプトシートからも「共につくる」という言葉は確認される。施設名を決定する際、学生から発案されたのは「みんなのチャレンジ基地」というキーワードであった。誰か一人のチャレンジではなく、そこに関わる人々のチャレンジが集まり、繋がる場という意味合いを込めていた。筆者はコンセプトシート作成の実務に携わったが、大学生の発案にインスピレーションされ、「共創」「共に取り組む」という言葉をコンセプトシートに何度か表記している。

しかし、これを文化と表現するに値するのは、「共につくる」を学生スタッフ自らが実践し、体現していることである。

図2は、2022年12月13日時点の、当時のプロジェクトが生成され、進化していく過程の観察から図式化した「プロジェクト創出の仕組み」である。²

ICLaを訪問したり、別の場でICLaの学生スタッフと出会った学生たちは、多く場合、相談の段階で「何かをしたい」という意思はありながらも、その内容については漠然としている。ゆえに、会話や相談をしながら、自分自身の「やってみよう」と言語化している(①)。その後、学生スタッフ自身が「こうなったらいい」や「私も一緒にやるならこうしたい」という、学生スタッフ自身が参画することを前提として、共にプロジェクトを立ち上げる³。より厳密に言えば、学生自身も一人の発起人や運営メンバーとして「仲間化」している(②)。その後、オンラインコミュニティなどでプロジェクトとして立ち上がり、コミュニティ参加者をはじめとした様々な人が参画できるようになっていく。ICLaに新たにきた大学生にもスタッフから「こういったプロジェクトが今動いて」と紹介したり、タイミングが合えばプロジェクトのミーティング中に飛び入り参加してもらったりと、オンラインと施設内の二つの場を有効活用しながら、プロジェクトへの参加を呼びかけ、推進していく(③)。こういったチャレンジの

² この図を見た学生スタッフは、大きく共感していた(2022年12月13日確認)ため、その後の彼らの実践に影響している可能性は高いことを指摘しておく。

³ ICLa 開設当初から、学生スタッフ自身がやってみようこと

をプロジェクト化するケースも多かったが、運営を続ける中で、学生スタッフも参画しながらのプロジェクト化が多くなっている。

様子を見て、大学生が新しい「やってみたい」に気づいたり、学生スタッフ自身が「自分も新しく始めてみたい」とプロジェクトを立ち上げたりという循環が生まれている(④)。

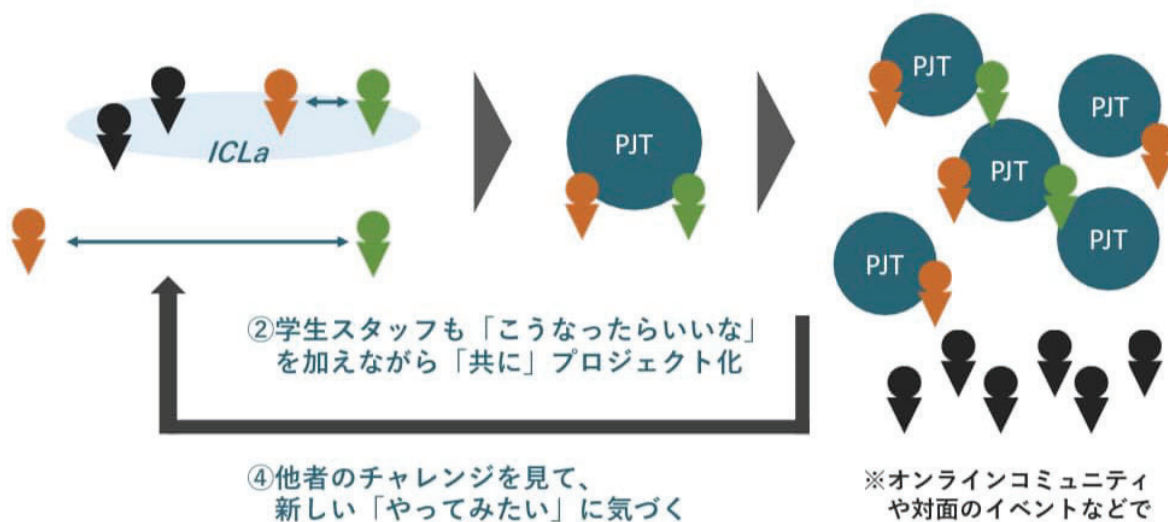
開設当初、学生スタッフは相談者のプロジェクトを「支援する」「伴走する」という関わり方を想定していた。しかし、実際には「支援者／被支援者」という関係性ではなく、同じ学生同士、対等な関係性を志向していった。これは、経営会議の「学生スタッフのあり方」についての議論の中で

スタッフから何度か「ICLaは学生スタッフ自身もチャレンジする一人」という表現にも表れている。

特筆すべきは、共につくるというあり方が、制度化されていないなかで、学生スタッフの実践の積み重ねから一つのあり方として確立していったことである。開設当初からコンセプトにも記載はされていたが、それを自分たちで体現し、知見を共有しながら進めていく過程自体が、文化として根付かせる装置にもなっているといえよう。

①ICLaでの個別相談や外部イベント等でスタッフと出会い、「やってみたい」を言語化

③プロジェクト、過程の見える化と参加の呼びかけ



- * スタッフは「支援する」のではなく、「共につくる」という関わり方を基本とする
- * 相談者がそれを行う「意味」を最重要視する(事業化・課題解決・規模などで測らない)
- * 多様で多数のPJTに出会える「場」をオンラインでも対面でもつくる

図-2 ICLaプロジェクト創出の仕組み

(3) 挑戦を促進する「仲間」という概念

「共につくる」というキーワードと同様に、学生スタッフの間で頻繁に語られるキーワードが「仲間」である。

筆者は開設当初、「仲間」という概念をあえて使わずにいた。ICLaは「コミュニティ」というよりも「プラットフォーム」であるというのが当初からのコンセプトであり、「仲間」という言葉により、親密な閉ざされた「コミュニティ」という見られ方をされ、学生たちから忌避されてしまうことを

懸念してのことである。

しかし、開設後の学生スタッフたちからは「ICLaは仲間と出会う場所である」という表現が多用されるようになる。この点について、学生スタッフAは、次のように経営会議メンバー内で表現していた。これは、ある学生の相談事例について、経営会議メンバー内で「ICLaはどのように応援していくといいのか」について議論していた際にメンバーチャットに投稿された言葉である。

“やっぱり僕の中ではICLaは仲間が見つかる場所であってほしいなっています。応援者よりも、良いも悪いも(グラデーションはあれど)一緒にやってくれる人がほしいって思うかも知れないです。思い返しても、なんかやろうと思った時って、「だれか応援して！」よりも「だれか一緒にやろ！」の方が思ったことある気がします。”

(2022年12月28日 経営会議メンバーとのチャットでのやり取りより、Aの投稿)

筆者はこの発言が印象に残り、Aに対して後日インタビューを行った⁴。Aにとって「仲間」という概念がどのようなものなのだろうか。

Aは次のように語った。

筆者：Aのなかで、(上述のチャットで)仲間というのが大事だと思った経緯を教えてくださいんだけど。

A：たぶん、自分がそうだから、だということだと思うんですけど。一人で成し遂げてきた成功体験が少ないからなのか、ひよっちゃうからなのか、何かやりたいなと思った時に、最初に何をやろうとなると(中略)最初に誰か同じ目線に立って、同じ物事を見て、一緒に物事を考えてくれる人が欲しいなと思うんですよね。それは、なんででしょう、寂しいわけではないんですけど。(中略)一緒に背中を押して肯定してくれる外的な要因が欲しいのかなと思ったり。まあ、一人じゃ心細いんですかね。何かやるときに。

また、筆者自身が懸念していた「コミュニティ」についてもAのイメージを聴いてみたところ、次のように語った。

A：僕のイメージしているコミュニティは、濃淡があればいいと思う。ゆるめの顔見知りの

程度から、一緒にガンガン、週3とか4とか顔合わせていくくらいでもいいし、それが内包されてコミュニティであればいいなと思う。コミュニティがいない人でも、何かしら繋がりがなくては生きられないと思うし、何かしらにうっすらとでも所属していることってあると思うんですよね。それがコミュニティになっていると思います。

筆者：じゃあ、Aの中では、仲間の中でも、グラデーションも色々あるってこと？

A：仲間っていうと、僕の中では濃度は濃い気がしますね。本格的に一緒にやってくれる人というか。

筆者：なるほど、一緒にやろうっていうのが大きなキーワードってことだね。

何かを始めるときに、「同じ目線で、同じ物事を考えてくれる」ような存在が必要であること、一步を踏み出すときに背中を押してもらえる存在が必要であるという、A自身の経験に基づいた語りである。興味深いのは、コミュニティには多様な濃淡があり、その濃淡が共存・内包される場がよいという認識はありながらも、その中でも「一緒にやってくれる」という濃度の存在が仲間であるという認識を持っていることである。

ICLaでは、大学生には「応援(する人)」が重要ではないか、という想いから「挑戦と応援が循環するチャレンジにやさしい静岡」というビジョンを設定しているが、Aの語りから、学生にとっては「応援者」よりも「一緒にやってくれる仲間」の存在が非常に大きなものであり、挑戦を促進する要因と考えられる。これは、前節で提示した「共につくる(特に②における営み)」とも一致する意味合いであり、Aも含めた学生スタッフの実践と内省からICLaという場の文化が構築されていることが確認できる。「仲間」の存在が挑戦を促し、それが複数存在する場がICLaの文化であり、特徴といえるだろう。

⁴ 2023年2月2日に実施

(4) 「友達の眼差し」が挑戦を阻害する—「意識高い系」という眼差しから

「仲間」の存在による挑戦の促進が確認できた一方で、「友達」という存在が挑戦を阻害する可能性がある。これも学生スタッフとのやり取りから確認された事象から検討したい。

2022年11月28日の経営会議において、「ICLaは意識高い系の人たちが集まっているように感じられている」という話題が学生スタッフからあがった。

常見陽平は、学生生活、特に就活に前のめりな「意識が高い学生」の出現とそれを揶揄する人の出現により「(揶揄的な意味での)意識の高い」という言葉が学生やインターネット上で認知されいったと指摘する(常見, 2012:25-27)。SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)が広がった2010年前後にこの認知が広がったとされるが、現代においても「意識が高い」「意識高い系」という言葉が、就活に限らず、学外活動に取り組む学生に対して使われ、否定的な印象を与える言葉として認知されている。

経営会議時にこの話題があがった際、学生スタッフは苦い表情をしていたことが気になった。その場では「気にしなくてもいい」と筆者は伝えたが、翌日の経営会議メンバーのチャットに筆者が作成したフィールドノーツを共有した。「意識高い系」というラベルを貼られることにより、居心地が悪くなっていく、魔力のようなものがあるのでは、という内容である。

その後、学生スタッフBより、次のような返信があった。

“まさしく、それを自分はひしひしと感じています。「意識高い系」がなぜマイナスの印象を抱かれるかを自分なりに考えてみた結果、学外で活動し、友達を巻き込むこと=マルチ=悪いこと、みたいな認識が学生間で広まっている気が

します。それによって、周りから〜見られるから、チャレンジができない。そんな人も何人かみてきました。つまり、「意識高い系」という言葉が環境にあることにより、チャレンジの機会損失が起きていると自分自身感じます。また、「周りの評価に敏感であることであること」も、意識高い系を魔力にしている一因だと考えます。Instagramなどの普及により、投稿やストーリーなど周りの人たちに共有し、周りから認められる、評価される(いいね数)ことが昔と比べ多くなっているのではないかと思います。それによって、周りの評価が自分の中で重要な判断軸となり、「意識高い系」の魔力が増した可能性もあると思いました。”

(2022年12月1日 経営会議メンバーとのチャットでのやり取りより、Bの投稿)

「意識高い系」という言葉と、「学外活動と友達を巻き込むこと=マルチ=悪いこと」の関係性は投稿だけでは不明な点もあるが、大学生が周囲からの評価を敏感に感じ取り、その評価・眼差しが彼ら自身の挑戦を阻害するというのがBの指摘である。ここでの認識にある「周囲」というのが、おそらく「友達」と言い換えられよう。日常的に所属する「友達」とのコミュニティにおける、自身の取り組みやそれを推進する自身の見られ方を意識するあまり、本来やってみたい挑戦を足踏みするということが、学生たちの社会では発生している。⁵

ICLaにおいて、まさにこういった大学生の挑戦を阻害する存在をいかにして乗り越えていくかは、実践として重要な課題である。次節において、その点の解決に関して考察していきたいが、彼らはこのような眼差しの中を生きているということ、強く認識しておきたい。

⁵ここで注意しなければならないのが、「仲間」が挑戦を阻害し、「友達」が挑戦を促進する可能性もあり得るということである。加えて、「仲間」と「友達」が別の概念であるのか、学生た

ちの間であえて選択されている概念なのかの詳細な検討も必要となろう。この点については、稿を改めて検討していきたい。

(5) 総合的考察—ナラティブ・アプローチの立場から捉えるICLaの実践

第1章で言及した問い、すなわち、「どのように挑戦をはじめ、自身の取り組みやプロジェクトを育てているのか、あるいは挫折を経験しているのか、それはどのように乗り越えていけるのか」に対して、フィールドワークを通じて、挑戦が起こり、育っていく過程から、それが生じる環境や要因について検討してきた。そして、「友達」をはじめとした周囲から向けられる眼差しによって、挑戦が阻害されていることも確認した。

では、彼らが一步を踏み出し、前に進んでいくためには何が必要なのだろうか。ここでは、ナラティブ・アプローチの理論を適用してみる。というのも、「何かをしたい」という漠然とした状態から、挑戦を通じて「ありたい姿や予想しなかった姿」になるという一連の学生の変化は、彼ら自身の自己の物語の変化と密接に関係すると考えられるからである。後述するナラティブ（語り、物語）という視点により、個々の学生の変容を詳細に捉えられることを期待して、ここでは総合的に考察してみたい。

まず、ナラティブ・アプローチについて概説する。ナラティブ・アプローチとは、ナラティブ（語り、物語）という視点から現象に接近する方法である（野口, 2005:5）。語られる行為自体（語り）、また語られた内容（物語）に着目した方法であり、心理学、社会学、教育学など様々な学問領域で研究がなされている。特に社会学においては、「われわれの生きる現実には様々なナラティブによって成り立っており、ナラティブによって組織化されている」（野口, 2009:11）という認識を前提としている。

社会を構成するナラティブについても、いくつか区別がされる。その一つがドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーという分類である。ドミナント・ストーリーとは、ある状況を支配する物語であり、オルタナティブ・ストーリーとは、支配的な物語を代替する物語である。ドミナント・ストーリーは、疑わない、疑いを寄せ

つけないことで支配的になり続けるが、それを疑い、代替する物語としてオルタナティブ・ストーリーを生成することで、次のドミナント・ストーリーとしてそれが状況を支配していく（野口, 2009:12-14）。

前節で指摘した「友達に意識高い系と見られてしまう」という大学生に広がる語りは、まさにドミナント・ストーリーである。すなわち、「挑戦する大学生は意識高い系と見られる」という物語によって大学生は支配され、挑戦に足踏みしてしまうのである。

そこで、この状況を改善するために、オルタナティブ・ストーリーを構築していくことが求められる。それは、「友達からの見られ方なんて、自分には関係ない」という物語かもしれないし、「友達にも挑戦が連鎖して、新たな挑戦が生まれる」という物語かもしれない。それは個々の状況ごとに定義されるものである（野口, 2009:14）。すなわち、ICLaという場において、もしくは「意識高い系」という言葉、眼差しに支配される当事者の間において、状況依存的に紡がれていくものである。

では、どのようにオルタナティブ・ストーリーを構築すればいいのか。

ナラティブ・アプローチの方法論の一つであるナラティブ・セラピーにおいて、その構築のプロセスは体系化されている。支配的な語りからはみ出る語り（例えば、「意識高い系ってよく考えると自分には関係なくて」という語り）をきっかけに、自分に好ましいストーリーを探求・構築していく過程を再著述、またはカウンセラーとの共同作業を強調して共著述と呼ぶ（国重, 2013:100）。

ICLaにおいて、漠然とした考えを持った学生が、スタッフと対話しながら「共に」プロジェクトを練り上げる過程は、再著述・共著述を通じたオルタナティブ・ストーリーの創出過程と捉えることもできる。「意識高い系」と「友達」から見られてしまうことを超えて、共に取り組む「仲間」と自分らしい挑戦を生み出していくことで、大学生の挑戦が前に進んでいく可能性がある。

同時に、「挑戦する大学生は意識高い系と見ら

れる」というドミナント・ストーリーの事象以外にも、個々が抱える問題の支配からオルタナティブ・ストーリーを創出していくことができる可能性は高い。本稿におけるフィールドワークではその具体的な事象は確認できなかったが、「何かをしたいが踏み出せない」という大学生にとって、「意識高い系」というナラティブ以外にも挑戦を抑圧するドミナント・ストーリーが認識されていることは想像できよう。加えて、挑戦の過程で障壁に遭遇した際にも、個々のナラティブに着目することで、それを乗り越えるオルタナティブ・ストーリーを都度創出し、前に進む物語を紡ぐことも十分考えられる。

個々の大学生が語るなかから、障壁を乗り越え、前に進んでいくオルタナティブ・ストーリーの創出の場としての、ICLaの可能性を確認した。学生スタッフは、相談に来る学生にとっては「共著者」である。また、Aが語る「仲間と出会える場」という認識で置き換えれば、「共著し合う仲間」たちと出会えることがICLaという場の特色と言い換えることもできるだろう。

4. 本研究の成果と今後の課題

本章では、第3章を踏まえ、本研究の成果と今後の課題を示す。

第3章の考察によって、ナラティブ・アプローチの視座に立つことで、場によって紡がられる言葉、意味、物語が、大学生の挑戦を支えていくというICLaの今後の可能性が示された。これは、場として望ましい状態・目標を持つICLaにとって、大きな意味を持つ。荒井浩道（2014）は、ナラティブ・アプローチの立場からコミュニティ支援を考える際、「地域の物語」という視点を導入している。個々の地域住民が持つ物語に着目し、問題を抱える場合はそれを一枚一枚引き剥がしながら、その影響力を弱め、その過程で問題の中にある「希望」を見出し、「地域の物語」を「希望の物語」

として語り直すというアプローチの有効性を示している（荒井, 2014:128-131）。

ICLaは、現時点では個々の大学生の物語を語り直すミクロの実践であるが、「挑戦と応援が循環するチャレンジにやさしい静岡」というビジョンを踏まえれば、地域である静岡というメゾレベルの変化を志向したプロジェクトである。今後、地域社会の変化を検討する際、荒井の視点は非常に重要である。大学生の実践と静岡という地域での「希望の物語」の語り直しを接続させていくことで、ICLaが目指すビジョンの達成へと繋げていくことができるであろう。今後は、よりメゾレベルへの影響を視野に入れたアクションリサーチとして展開していきたい。

また、第3章でも言及したとおり、「意識高い系」という問題（ドミナント・ストーリー）以外のナラティブについては、十分に確認ができなかった。今後、相談者と学生スタッフとの対話の場に筆者が参画すること、もしくは筆者自身が相談者と対話するなかで、語りの変容やオルタナティブ・ストーリー構築の過程を観察することが求められる。加えて、時系列と共に相談者のナラティブを追いかけることで、物語が続けて語り直されていく過程を捉え、どのように挑戦が支えられていくのかを捉えることも必要となってくる。これらの点も踏まえ、今後の研究アプローチを検討していきたい。

筆者はフィールドに身を投じ、フィールドの実際を描くこと、そこにある社会的背景や仕組みの抽出を志向してきた。その結果、本研究の関心である大学生の挑戦を取り巻く実像を僅かではあるが描くことができたが、あくまで今回提示した仕組み、要因、支援のあり方は仮説的なものであり、これが他の実践へと即座に応用可能とは言い切れない。アクションリサーチという特性を活かしながら、今回生成された仮説的知見の検証と、大学生が挑戦しやすい環境構築とその条件を実践的に検討していきたい。

参考文献

- 1) 今永典秀, 2022, 「若者と地域企業の協働において地域イノベーションを生み出す「場」」 岐阜大学工学研究科博士論文
- 2) 坂倉杏介, 2020, 「人と地域がつながる「場」」 坂倉杏介・醍醐孝典・石井大一郎編『コミュニティマネジメントーつながりを生み出す場、プロセス、組織』中央経済社, 32-75
- 3) 矢守克也, 2010, 『アクションリサーチ実践する人間科学』新曜社
- 4) 令和4年11月7日静岡大学プレスリリース資料『静岡市駿河区に「みんなのチャレンジ基地 ICLa(イクラ)」開設』
(2023年2月3日閲覧)
<https://www.shizuoka.ac.jp/cms/files/shizudai/MASTER/0100/LJrliDCI.pdf>
- 5) 常見陽平, 2012, 『「意識高い系」という病ーソーシャル時代にはびこるバカヤロー』ベストセラーズ
- 6) 野口裕二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房
- 7) 野口裕二編, 2009, 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- 8) 国重浩一, 2013, 『ナラティブ・セラピーの会話術ーディスコースとエイジェンシーという視点』金子書房
- 9) 荒井浩道, 2014, 『ナラティブ・ソーシャルワーカー “支援しない支援” の方法』新泉社